



音楽を媒介に深掘りして たどり着いた台湾の現在

ILHA FORMOSA（イラ・フォルモサ）とは、ポルトガル語で「美しい島」という意味。16世紀の大航海時代に台湾島を訪れたポルトガル人がそう名付けたと伝えられています。

2022年8月、空族は通訳を含む7人体制で、約1カ月かけて台湾各地を駆け巡り、撮影を敢行。その模様を中心に14分25秒の映像インスタレーションとして構成したのが本作です。

日本を含むアジアを舞台に映画をつくり続けてきた空族の制作スタイルは、かなり独特。設立

メンバーの富田克也氏や相澤虎之助氏をはじめ、スタッフは長期間にわたって何度も現地に入り、その地で暮らす人々と交流を深めながら、長編映画のシナリオを練り上げていきます。そして本編の撮影時には役者として登用するなど、現地の人たちと一緒に映画づくりに取り組むという独自のアプローチを採用。空族ではこの長期にわたる準備期間を「先遣任務」、映画本編の撮影を「本作戦」と位置付けています。

「その土地のことを知るために、最も手取り早いのが音楽です。スタッフにMr.麿やMMM（スタジオ石）、Young-G（stillichimiya）という

ヒップホップのクルーがいるんですが、彼らはまるでDJがレコードをディグる（中古レコード漁りのスラング）かのように、現地の音楽シーンをどんどん深掘りして、あっという間に深いレイヤー（階層）にまで到達してしまうんですよ」

台北や台南、高雄などの西側の都市を皮切りに、中央山岳部の南投県、南部の屏東県、東部の台東県や花蓮県まで足を運び、地元のミュージシャンを訪ね歩きながら、音楽フェスや豊年祭といった催事の模様も収録。音楽を媒介に、台湾の現在をとらえることに成功しています。

原住民の存在に着目して 歴史のレイヤーをたどる

「高雄映画祭で知り合った現地のプロデューサーから『台湾を舞台に映画を撮らないか』と誘ってもらったのがきっかけです。その後、SCARTSからも声をかけていただいて『それじゃあ、空族から見た台湾の姿を紹介する作品をつくろう』ということになりました」

副題に「空族 台湾先遣隊調査報告」とある通り、本作は近い将来、空族が撮ろうとしている長編映画のプロローグにあたります。

「台湾島はちょうど九州ぐらいの面積で、標高3000m級の峰が269座もある険しい地形が特徴です。日本にあるのは21座ですから、いかに険しいかがわかりますよね。撮影を続ける中で、

はるか昔に大陸から移住してきた本省人と、1947年前後に蒋介石と共に渡ってきた外省人という漢民族だけではなく、アミ族やルカイ族、パイワン族、セデック族といった原住民の存在を知り、興味を深めていくことになりました」

漢族が中心の都市部から、険しい山岳地帯で暮らす原住民の文化圏へ。そこで受け継がれている風習を追いかけて、歴史のレイヤーを奥へ奥へとたどっていくことで、これまであまり見たことのない台湾像が立ち上がってきました。

つい立ち止まりたくなる 気になるシーンを次々と

西2丁目地下歩道は通勤をはじめ、市民の皆さんが日常的に使う通路でもあります。

「僕も下見を兼ねて実際に歩いてみたんですが、4面スクリーンの前を通り過ぎる時間はだいたい十数秒。皆さんが足早に行き来する中で、いろんな場面を少しずつ目にしてもらって、そのうちにどうしても気になるシーンが出てきて、ついにいつの日か、立ち止まって見てみたくなる——そんな作品にしようというのが僕らの狙いでした。編集はかなり大変でしたが、ありったけの情報を詰め込んでいます」

各シーンの左下にはカチンコを模したアイコンで、場所や日時、使用したカメラの機種、シーンタイトル、ひと言メモを表示。要所にテキストによ

る解説も挿入し、さらには画面に映る二次元コードをスマホで読み込むと、関連する動画やサイトにジャンプするという工夫まで施されています。つまりはスクリーンの外まで周辺情報があふれ出しているのです。

空族は映画の制作のみならず、配給や上映までを一貫して自分たちで手掛けることにこだわって、これまで作品のソフト化や配信をしてくれませんでした。この作品は空族としては初めての公共空間での常設上映となります。

「台湾は親日のイメージが強い地域。実際にどこに行っても親切にってもらって、本当にありがたいことだなと思っています。そんな台湾で暮らす、さまざまな人たちの魅力が詰まった映像作品になっていると思いますので、ぜひご覧ください」

西2丁目地下歩道映像制作プロジェクト

札幌市民交流プラザとさっぽろ地下街オーロラタウンをつなぐ「西2丁目地下歩道」を舞台に、多様で実験的な映像表現を探究するプロジェクトです。4面構成の横長のスクリーンと歩行空間という特徴を生かし、この場所のために制作された作品を上映しています。

上映スケジュールは
SCARTSウェブサイトをご覧ください。

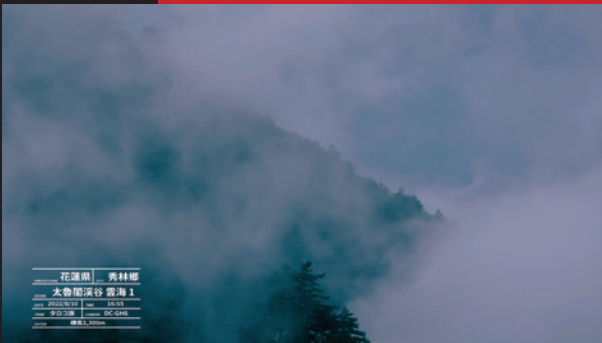


富田克也

1972年山梨県生まれ。2003年に発表した処女作、『雲の上』が「映画美術学校映画祭2004」にてスカラシップを獲得。これをもとに制作した『国道20号線』を2007年に発表。『サウダーヂ』（2011）ではナント三大陸映画祭グランプリ、ロカルノ国際映画祭独立批評家連盟特別賞を受賞。国内では、高崎映画祭最優秀作品賞、毎日映画コンクール優秀作品賞&監督賞をW受賞。

空族

映像制作集団。2004年、“作りたい映画を勝手に作り、勝手に上映する”をモットーに、空族を名のりはじめる。常識にとられない、毎回長期間に及ぶ独特の映画制作スタイルを貫き、作品ごとに合わせた配給、宣伝も自ら行ない、作品はすべて未ソフト化という独自路線をひた走る。テーマは日本に留まらず、広くアジアを見据えている。



SCARTS 企画公募 2023

岸田理生アバンギャルドフェスティバル in Sapporo
岸田理生没後20年記念公演

演劇
恋の
激情・火學お七

(原作『火學お七』岸田理生) + 演劇ワークショップ

劇団 風蝕異人街 (ふうしょくいじんがい)

寺山修司作品の上映を目的に1997年に旗揚げ。札幌市中央区にあるアトリエ「阿呆船」を拠点に道内外で活動。アバンギャルドにこだわる作品づくりや独特の身体様式美に定評がある。2013年にはテジョン演劇祭に招聘され、無言劇を上演。2021年札幌劇場祭「マクベス」の上演により優秀賞受賞。

こしばきこう
主宰 / 演出家 / 劇作家
札幌市生まれ。北海道大学大学院修士修了・研究生修了。2004年には財団法人舞台芸術財団演劇人会議利賀演出家コンクール優秀賞受賞。2005年にロシア研修(財団法人舞台芸術財団演劇人会議主催)に参加。

三木美智代
代表 / 女優
早稲田大学卒業。青年座研究所卒業後、東京での活動を経て劇団に参加。2005年より演出家・鈴木忠志氏による俳優育成プロジェクトに参加し、スズキメソッドを受講。劇団外でも活動するほか、演劇ワークショップの講師も務める。

チケット発売中!

7月7日[金] - 9日[日]
SCARTSコート

7月7日[金] 19:00 開演
7月8日[土] 14:00 開演 / 19:00 開演
7月9日[日] 14:00 開演
※開場は各公演30分前

[全席自由・税込]
前売 2,000円
当日 2,500円

QRコード
オンライン
予約フォーム

「八百屋お七」を巡る夢幻譚。円形舞台で魅せる現代詩劇

寺山修司作品の上演を中心に活動を続ける「劇団 風蝕異人街」。今年3月には、寺山の代表作「毛皮のマリー」を3日間にわたって上演し、全公演が完売するなど、設立25周年を迎えてますます注目度が高まっている実力派の劇団です。

そんな「劇団 風蝕異人街」がSCARTS(スカーツ)で披露するのは、寺山修司の演劇実験



左より: こしばきこう氏、三木美智代氏

室「天井桟敷」に入団し、その後も独自の表現世界を切り拓いた岸田理生の戯曲『火學お七』。江戸時代、恋人に会いたい一心で放火事件を起こして火刑に処された「八百屋お七」のストーリーは、歌舞伎や文楽をはじめ、あらゆる形式で語られてきましたが、本作はこの悲恋物語を岸田流の解釈で語り直した、幻想味あふれる現代詩劇です。

札幌市民交流プラザ1階のSCARTSコートに、観客が四方を取り囲む円形劇場を設営。舞台装置を排したシンプルなステージで、記憶と夢幻がないまぜになった怪しくも艶やかな物語を編んでいきます。

「岸田さんならではの詩的で美しい世界を、エンタメ的な要素も取り入れて、どう伝えていくか。SCARTSコートというオープンな

スペースでの公演は、私にとっても新たなチャレンジです」と話すのは、演出のこしばきこう氏。一方、劇団の代表で主演を務める三木美智代氏は「最近では古典劇の上演にも力を入れてきましたが、この『火學お七』は、寺山と古典劇をミックスしたような作品。お七と男たちが織りなす群集劇という側面もあります。私たちらしい『身体と言葉の融合』に重点を置いた舞台を、これまで演劇にあまり触れたことがない方たちにも、ぜひ楽しんでいただければ」と語ってくれました。

また、公演に先立ち、7月5日(水)と6日(木)には、三木氏が指導にあたる「演劇ワークショップ」も開講。演出家の鈴木忠志氏が考案した俳優訓練法「スズキメソッド」を取り入れたトレーニングを体験できます。

SCARTS 企画公募 2023

シロとメロの暮らし展

7月8日[土] - 17日[月・祝] 10:00-19:00 SCARTSスタジオ

入場無料



ランドリーズ

あけたらしめとこんのあきひとが2022年に結成した創作ユニット。しろめが描き出す「シロとメロ」の世界を、工作の専門家であるこんのがスケールを増幅して提示する。今回の企画公募がユニットとしては初の展示となる。

あけたらしめく 写真:左)

モノクロ画家
1988年生まれ。シロとメロという双子のキャラクターをモチーフにした作品で、2013年から作家活動を開始。2020年より札幌に拠点を移し、広告ビジュアルやMV、漫画などの受注制作、ドローイングやシルクスクリーンでの作品制作を行う。

こんのあきひとく 写真:右)

こんの工作所 所長
1983年生まれ。札幌出身。木や紙などを材料に、大きなものから小さなものまで、工夫を凝らしたもののづくりに取り組む。イベントや展示会の会場装飾、舞台やCMの美術のほか、顔出し看板や店舗什器、雑貨まで、幅広い守備範囲が持ち味。

不用品がよみがえるワークショップ

「シルクスクリーン絵付け体験」

◎ SCARTS スタジオ

※申込方法などはHPをご覧ください
https://www.sapporo-community-plaza.jp/event_scarts.php?num=3083



札幌のまちの歩みと家族の物語を重ね合わせて

札幌市中央区の山鼻・行啓通界隈で商いを始めて、今年で100周年。地域密着型の仕出し料理店として愛されてきた崑久一(きくいち)本店には、知る人ぞ知る、もう一つの顔があります。

それは当主である伊藤家の一族から、美術やデザインに携わる人材が数多く輩出されていること。絵画や彫刻をはじめ、漆工芸、立体造形、テキスタイル、映像、グラフィックデザイン、照明デザイン、グラフィティアートなど、多彩なジャンルのアーティストが活躍しています。

この展覧会では、伊藤家が所蔵する膨大な写真や資料と、ゆかりの作家陣のさまざまな作品を展示。大正から昭和、平成、令和にかけて、一族が紡いだ暮らしとアートの営みが立ち上がります。

「本店には昔からステージ付きの大広間があるんですが、何かにつけて集まって、パフォーマンスを披露したり、オヒネリが飛んだり。元々が商店街の仕出し屋さんですので、人を喜ばせるのが大好きな家風なんです」

そう話すのは、仕掛け人であるプロダクトデ

ザイナー／アートディレクターの伊藤千織氏。崑久一と伊藤家の記録をアーカイブ化して未来につなぐミッションを担っています。

構成は、貴重な写真や所蔵品で店とまちの歩みを振り返る第1部、2代目の隆起氏が遺した戦中から晩年までの絵画や造形作品をそろえた第2部、そして20代から80代までの現役作家の作品で過去と未来をつなぐ第3部が交錯する展示を予定しています。

「見どころは祖父の隆起が戦時中に移住した海南島での生活や従軍体験を記した画帳や、今回新たに見つかった親類同人誌でしょうか。祖父は常に手を動かして何かを作っている人で、崑久一の木彫看板や弁当の掛け紙の図案も自作しています。そんなものづくりのDNAが私たちに受け継がれているのかもしれない」

伊藤家のファミリーヒストリーは、観客一人ひとりの家族の物語とクロスオーバーするはず。

「ご自身の家族の歴史とストーリーを重ね合わせて見てもらえれば。幕の内弁当のような楽しい展示にしたいと思っています」



伊藤千織

プロダクトデザイナー／アートディレクター

1966年札幌市生まれ。90年女子美術大学産業デザイン科卒業。92～94年政府給付生としてデンマーク王立芸術アカデミー建築学校に留学し、家具・空間デザインを学ぶ。99年伊藤千織デザイン事務所を設立。「もの・こと・ば」のデザインをテーマに、空間プロデュースから製品開発、造形デザインまで、幅広いジャンルの創作活動を展開している。北海学園大学、東海大学非常勤講師。(一社)北海道デザイン協議会会員。

崑久一本店(有限会社 喜久一)

1923(大正12)年創業、札幌市中央区に店舗を構える仕出し料理専門店。創業者である伊藤孝一から現在の5代目伊藤隆彦まで、家族経営を続けている老舗。一方で2代目の伊藤隆起をはじめ、美術・アートの作家や美術教育に携わる人材を多数輩出している。 <https://kikuichihonten.com>

SCARTS 企画公募 2023



動画と原画で見せる墨絵アニメーションの世界

そよ風がやさしく吹きわたる春の情景。画面から飛び出してくるような荒々しい波のうねり。そしてそこに息づく、恐ろしくも生命力にあふれた「もののけ」や動物たち。

40年以上にわたり、墨絵アニメーションの制作に取り組んできた横須賀令子氏。現像が必要な8ミリや16ミリのフィルム時代から、ビデオの普及期、そして映像ソフトを用いてパソコン上で仕上げる現在まで、動画化する手段は移り変わっても、1コマずつ、1枚ずつ、丁寧に描く手法は今も変わりません。

「昨年、これまでの作品やメイキングをまとめた書籍を出版した際に『ただ映像を流すだけではなく、いろんな見せ方の可能性があるんじゃないか』と気づいたのが、今回の企画公募に応募したきっかけです。手描きの素材感のある作品を4面の壁に投影しますが、これは私にとっても初の試み。さらにたくさんの原画を布に貼り、天井からぶら下げて連続的に展示するなど、見せ方にも工夫を凝らすことで、手描き

アニメーションの魅力を多面的に伝えられたいと考えています」

横須賀氏といえば、和紙に墨と筆で描くモノトーンの作風で知られていますが、一方で水彩や色鉛筆をはじめ、さまざまな画材を駆使した鮮やかな作品も。一部は横須賀氏のYouTubeチャンネルで公開中です。

実際の制作にあたっては、まずイメージスケッチ(下描き)で大まかな構成をつくることからスタート。1秒間に必要な原画の枚数は8から12枚で、トレース台の上で1枚ずつ墨をのせ、彩色していきます。これらの原画をスキャンして微調整し、そのデータを映像ソフトで動画化。編集、音入れを施して完成というのが大まかな流れとなります。映像分野はデジタルが主流になりつつありますが、墨や和紙を生かした表現もまだまだ奥が深そうです。

「散策が好きなのですが、札幌の自然の中を歩くとアイデアが浮かんできて、どんどん描きたくくなります。今回の個展が、手描きアニメーションの

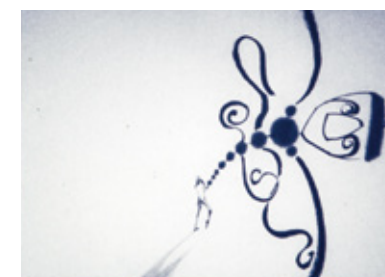
魅力に触れていただくきっかけになればうれしいですね」

横須賀令子

茨城県ひたちなか市生まれ。1981年専門学校卒業製作「幻」(16mm)から短編アニメーション制作を始める。和紙に墨で描く筆絵ならではのタッチや、にじみを生かした独特の世界観の手描きアニメーションを多数発表。NHK「みんなのうた」などのTV番組やCMのアニメを手掛けるほか、海外の映画祭での上映も多数。96年3月より札幌に移住。YouTube <https://youtube.com/@reikoyokosuka> BOOTH「墨の庭アニメーション」 <https://reikoyokosuka.booth.pm/>



ライトテーブルのトレース台の上で1枚ずつ筆を入れていく。着想のきっかけはさまざまで、イメージスケッチからアイデアを膨らませることもあれば、音楽がヒントになることも



1-4 崑久一2代目隆起氏と彼が遺した画帳など

5 伊藤隆道《空と地の軌跡》

6 伊藤千織 ペーパーリース

7 伊藤隆介「Realistic Virtuality」シリーズ

戦後の暮らしが垣間見える親類同人誌「しんるい」は必見

SCARTS 企画公募 2023

崑久一本店創業百周年記念展

崑久一100年

まちとアートと家族の物語

8月31日[木]-9月10日[日] 11:00-19:00 SCARTSコート 入場無料